

カンボジア農民詩人あるいは在家上座仏教徒としてのクロム・ゴイの視点

The Perspective of Kram Ngoy as a Cambodian peasant poet or lay
Theravada Buddhist

調 邦行
Kuniyuki Shirabe

東京外国語大学総合国際学研究科
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨

クロム・ゴイ（1865-1936）はカンボジアを代表する国民的詩人である。彼が生きた時代、カンボジアはフランス保護国体制下にあり、人々は社会の底辺で呻吟していた。出家を経験した彼は、仏教こそカンボジア人の精神的支えであるべきだと考えていた。ゴイは安定した役人の職を辞して一介の農民となり、仏教を生活の基本として堅実に生きることが詩に託して人々に説いた。しかし、彼が見たサンガは僧の破戒が日常化し、カンボジア仏教の多数派であるモハーニカーイ派内部は変革運動を進める新仏法派と伝統を守ろうとする旧仏法派とが激しく対立しあっていた。ゴイは人々を啓蒙する一方で、サンガの実態を厳しく批判した。在家信徒としての深い仏教思想を反映した彼の作品は、人々や社会を思いやる教えや訓戒で貫かれている。

Kram Ngoy (1865-1936) is one of the most popular poets in Cambodia. In the times when he lived, the peasants were in desperate situation at the bottom of society. He dared to throw up his stable official job to join them and live as one of the peasants. Having monk experience, he believed that the Buddhist teachings should be the spiritual prop for the suffering Cambodian people. In his poetry, he advised the people to live self-sustaining life according to the Buddhist teachings. However, the Cambodian sangha was in a deplorable state, where many monks violated the precepts, and, in addition, Buddhists were disunited into the old and new *dhamma* sect. He denounced the sangha while enlightening the poor people. His works, in which his devout Buddhist



thought as a lay person is strongly reflected, are full of the lessons and admonitions for the Cambodian people.

キーワード：チバップ、韻律詩、在家、仏教変革、旧仏法、新仏法

Keywords : chbap, verse, lay people, the Buddhist reform, the old and new *dhamma*

はじめに

クロム・ゴイ（1865-1936）は近代カンボジアを代表する国民的詩人である。出家した後、還俗して農村に入り一農民として暮らした。彼は即興詩を作り、民族弦楽器であるサーディアウを自ら演奏し美しい声で歌うことを得意とした。また、仏教の知識も豊富であったため村の識者として敬愛され、農民の立場に立って詠んだ詩は人々の心を捉えた。彼が生きた時代、カンボジアはフランス保護国体制のもとで近代化の道を辿る一方、多くの国民は社会の底辺で貧困に苦しんでいた。彼は自らの僧侶経験を通して、仏教の教えこそが彼らの精神的支柱であるべきだと考え、貧しい人々を啓蒙する一方で、サンガのあるべき姿を求めた。残されている彼の作品は、すべてカンボジアの人々とサンガに向けた教訓、訓戒であり、その根底には彼の仏教思想が色濃く反映している。

クロム・ゴイの詩に関する研究では、リー・ティアムテン（លី ព័ន្ធមុតី）が仏教研究所¹⁾ 発行のゴイの作品を四つのテーマに分類し、それぞれ詩の数節を抜粋して『クメール人作家ピロム・ゴイ』[1960]として編集した冊子が嚆矢である。リーは退役した仏教研究所の学者たちやゴイの親族から経歴をはじめ容姿、服装、サーディアウの演奏の様子、エピソードなどを聴き取り記録した。また、ある大臣がゴイの名声を聞き王宮に呼び寄せて国王の前でゴイに歌わせたことや、フランス人学者ジョルジュ・セデス（Georges Cœdès 1886-1969）に紹介し、セデスがゴイをタイまで同行してタイ国王に詩を披露させたこと、更に、仏教研究所事務局長シュザンヌ・カルプレス（Suzanne Karpelès 1890-1969）にゴイを紹介したことなどが記されている。彼女がゴイの詩を職員に記録させ4分冊として編集し、発行させたことにより作品が文献として残されたことがここで明らかにされている [លី 1960]。

キン・ホク・ディ（កែវ ហុក ឌី）は上記のリーによるゴイ研究をもとに『クロム・ゴイ作品集』[2008]として仏教研究所発行の4作品をまとめて編集した。その中で、カルプレスが1930年にゴイを仏教研究所に招きサーディアウの演奏に合わせて即興詩を

詠わせ、それを研究所職員に筆記させたことが紹介されている [ឃីង 2007:11]。また、この研究によって、ゴイを王宮に呼びセデスに紹介した大臣が詩人としても名を馳せたソン・ディエプであったことが明らかにされた。更に、クメール共和国時代(1975-1979)にクメール作家協会が「クロム・ゴイ賞」を作り、その後のカンボジア人民共和国時代(1979-1989)には学校教科書にもクロム・ゴイの詩が採用されたことが記されている。また、今日では民間の職業訓練センターとして「クロム・ゴイセンター」が設立されゴイの理想を実現しようとする活動がなされていることにも言及している。

ポイ・キア (ព័យ គា) はイー・トン (ឃី តុង) を含む数人の研究者と共同して、チュオン・ナートの『カンボジア語辞典』²⁾ を基準にした正書法に基づき現在残されているゴイの詩を見直した上で、『クロム・ゴイ』としてすべての詩を収めた詩集を編集し発表した [ព័យ 2016]。この詩集には仏教研究所が編集した4篇だけではなく、その後に発表されたゴイの作品2篇も含まれている。

本稿では、これらの研究を踏まえてゴイの詩に込められたテーマを俯瞰した上で、在家仏教徒としての彼の視点に焦点を当て、彼が人々をどのように啓蒙しようとしたのか、仏教にいかなる役割を求めたのか、更に、当時サンガに新風を吹き込んだ仏教変革運動³⁾ に彼の考え方がどのような影響を与えたのかを考察することを目的とする。検討に当たっては、ポイの編集による作品集の中から詩文を抜粋し、筆者による日本語訳文として引用する。なお、本稿は別途論じようとする「近代カンボジア仏教の変革とその意義ーチュオン・ナート師の視座を中心として」に関する基礎研究の一環として位置付けられる。

I. カンボジア文学とクロム・ゴイの詩

ゴイの作品はすべて韻律詩である。20世紀初頭までのカンボジア文学は、詩のみならず、すべて韻文形式で表現された。散文による小説が出版されたのは、彼の作品が発表された数年後の1938年のことである⁴⁾。カンボジアの代表的古典文学といえば、インドの叙事詩『ラーマーヤナ』のカンボジア版『リアムケー』があげられる。また、上座仏教がカンボジアに入った後、ブッダの前世物語『ジャータカ』475話の中から

10 話を抜粋した『トッ・チアドク (10 のジャータカ)』なども作られた。そのほかに僧や王族などの文化人が創作したと考えられる冒険譚や仏教思想に基づく物語がいくつか残されている。これらの物語は代々口承で伝えられ、文字文学として人々の目に触れたのは 18 世紀以降のことであった [岡田 2014:56-57、2017:2-3]。

カンボジアは 15 世紀にアンコール王朝が衰退すると政治的にも不安定になり、同時に文学も廃れていった。再び文学が盛んになるのはアン・ドゥオン王[在位 1848~1860]の時代になってからのことである。タイの王宮で学び、詩人でもあった王は、宮廷に僧や詩人たちを集めて文学の保護に力を入れた。一方で、カンボジアの庶民は『リアムケー』やジャータカの「布施太子物語」を好んだ。そのほかに「チバップ」とよばれる道徳集が寺子屋を中心として広く教えられていた。

保護国フランスのもとで近代的学校制度が普及するまでは仏教寺院が学校の役割を果たし、ここで子供たちはチバップを暗誦して道徳的な知識を身に付けた。チバップには規則・規範という意味があり、内容としては主に仏教の教えが多く語られている。女性に対し良妻賢母であるように説く「チバップ・スライ (女性への訓え)」、男性に対してまじめに働くことを説く「チバップ・プロホ (男性への訓え)」、父母・教師を敬うことを訓える「チバップ・クロム (良き行いの訓え)」などがある [岡田 2017:2-3]。ゴイの作品でも「チバップ・ケー・カール・トマイ (新しい時代の遺訓)」「チバップ・ルバック・トマイ (新しい教訓)」のように訓えという意味でのチバップという語が好んで使われている。

後述するように、ゴイの作品はすべてカンボジア詩の定型に則って作詩されている。カンボジアの伝統的な詩型は 4 言歌、7 言歌、8 言歌など約 50 種にのぼるとされ、それぞれ音節数と押韻の方法が決められている。押韻法には多くの種類があり、一つの韻律詩型を複数の吟唱法で表現できる。現在のカンボジアの学校教育では低学年から古典の定型詩の基本を学び、高学年からは教材でさまざまな詩形を教えられる。多様な技法による詩作と吟唱は、現在でも多くの人々の趣味とされる [上田 2016:28]。ゴイが詩作をよくし、人々が彼の詩を愛し親しんだ背景には、このようなカンボジアの文学的風土が影響しているものと考えられる。

II. ゴイが生きた時代

1. 20世紀初頭のカンボジア社会と仏教界

ゴイの詩の背景を理解するために、当時のカンボジア社会と仏教界の状況を概観しておきたい。1863年、カンボジアはフランスと保護国条約を結び近代化の道を辿り始めた。しかし、1867年以降フランスのインドシナ統治体制に組み込まれ、政治・経済政策などの権限はフランスの掌中に握られていた。保護国ではフランス国代表である高等弁務官を頂点として市、州の長はフランス人が実権を握り行政を司っていた〔シルベストル 2019:49-80〕。また、都市部における銀行や機械、自動車輸入代理店などのビジネスはフランス人、穀物、胡椒の貿易商、レストラン、商店、漢方医、薬局、理髪店、映画館などの事業主は中国人、下級官吏、洋服屋、靴屋、本屋、銀行や外国ビジネスの書記はベトナム人、苦力や露天商はカンボジア人という社会構造ができあがり〔オズボーン 1996:139〕、大部分の国民は農民として苦しい生活を強いられていた。国民には人頭税を始めとする種々の直接税⁵⁾や間接税⁶⁾、徴用税⁷⁾が課されるなど〔シルベストル 2019:177-213〕、カンボジアにおいてもフランスによる搾取と差別は他の植民地と同様に過酷なものがあった。

そのような状況に対して、農民たちは散発的に抵抗運動を起こした。フランスの保護国となって以来、地方では度々反乱が起きた⁸⁾。1916年には数万人のカンボジア農民が保護国フランス当局の税、労役に対する不満を国王に直接訴え出るデモを起こし〔Osborn 1978〕、1925年には徴税に出向いたコンポンチナン州弁務官バルデスが殺害されるなど⁹⁾、農民の直接行動による重大事件も勃発していた。また、カンボジアの村々には仏教寺院があり国民の大部分は仏教徒であったが、1920年代に隣接するコーチシナでカオダイ教¹⁰⁾が興ると多数の農民が信者となって仏教から離れる傾向¹¹⁾も見え始めていた〔Edwards 2008:197-202〕。

カンボジアはスリランカ、タイ、ミャンマー、ラオスなど上座仏教を信奉する地域の一角にあり、仏教寺院は社会基盤的役割を果たしていた。しかし、アンコール王朝の衰退以来、カンボジアはタイとベトナム両国との戦乱¹²⁾により経典は散逸し、僧が正しい修行を積むにも支障が生じる状況にあった〔Uṇ 1993:19〕。19世紀半ば、カンボジア国王の座についたアン・ドゥオンは国家基盤を安定させるため仏教の復興に力を注ぎ、

タイのタマユット派¹³⁾に倣って戒律を重視するトアンマユット派¹⁴⁾を興した [ស៊ីន 2012:36]。一方で、カンボジア仏教の伝統派は、新興のトアンマユット派に対しモハーニカーイ派¹⁵⁾と呼ばれるようになった。その後、モハーニカーイ派の僧たちの中で仏典収集と三蔵研究のためタイに留学する傾向が強まった。これらの留学僧たちは、仏典を中心に据え厳しく戒律を守るタイ・タマユット派の思想的影響を受けて帰国するようになった。

タイ留学から帰国した僧たちによる三蔵を中心に据えた実践思想は、20 世紀初頭に比丘となったチュオン・ナート (1883-1969) をはじめとするモハーニカーイ派の若手僧侶に引き継がれた。経典に忠実な実践を志向する彼らは、同派内部で仏教変革運動を起こした。変革派はトアンマユット派と同じようにパーリ語三蔵のみを聖典とし、特にサンガの清浄を守るために僧が守るべき戒律を説く律蔵に忠実な実践を目指した。その背景にはクロム・ゴイが詩の中で嘆いているように、非合理的な民間信仰の蔓延や、仏典の散逸、僧侶の仏教実践の乱れなど [ឥឃ 2016:102-116]、カンボジア仏教の衰退に対する若い僧たちの危機感があった [ហ្មុត 1993:18]。

仏教変革派は、脚色されたジャータカや呪術的な儀式を排除して律蔵の教えに沿った実践に拘り、紙に印刷された経典を用い、パーリ語仏典をカンボジア語に翻訳するなど、従来の伝統的な仏教実践を否定した。変革派僧たちはパーリ語三蔵経典を断片的に解説しては記録し、体系的な仏典として編集した。更に、彼らはこれを寒天板などで複写しサンガや在家の人々に広めていった [ហ្មុត 1993:10]。1920 年代になるとチュオン・ナートやフオト・タート (1891-1975) の働きかけによって高等パーリ語学校¹⁶⁾での仏教書の印刷が許可され、印刷物としての仏典が徐々に人々に普及していった。伝統派はこれに対して貝葉仏典の神秘性がなくなるとして、紙に印刷された経典は聖典とは認められないと主張して強く反発した [ហ្មុត 1993:23-24]。

当時一般の在家仏教徒が仏典を所有することは難しく、パーリ語で唱えられる三蔵の教理はほとんど理解されていなかったといつてよい。彼らは寺院で布施太子物語や輪廻の説教を聞き、現世利益と来世のために布施をして徳を積むことが日常化していた [Hansen 2007:27-28]。一方で、パーリ語三蔵は出家者のみが学んで理解すべき聖典であり、その実践修行を通して自らの解脱を実現するための規範とされていた [石井 1993:304-314]。しかし、変革派の僧たちは仏典をサンガの中に留めることなく、衆生

に対しても教理の理解を広めることに拘った [ឃុំ 1927:113]。カンボジア語に翻訳された仏典が普及していったことによって、在家でも仏教の教えを母語で理解することが可能になった。翻訳仏典が衆生自らによる仏教教理の理解を助けたという点で、カンボジアの仏教変革は従来の上座仏教のあり方に画期的な変化をもたらしたといえる。

仏教変革運動は従来のカンボジア仏教に新しい流れを生み出したが、同時にモハーニカーイ派を伝統派である旧仏法派と変革派としての新仏法派に分裂させ、在家を含む仏教徒同士を激しく対立させる事態を生み出した [ឃុំ 1993: 11]。多少時代は下るが、チュット・カイ（1940～）の私小説『寺の子供』の一節にその対立の様子が端的に描写されている。

その寺は変てこな寺だった。僧侶が二つの派、つまり旧派と新派に分かれていたのだ。それは「古い仏法」と「新しい仏法」の違いからくるもので、— 略 —。一つの寺に住職様が二人、というのは一つの山に二頭の虎がいるようなものだ。僧侶たちはそりが合わず、寺に寄宿している子どもたちも喧嘩ばかり、犬まで相性が悪く、旧派側の犬は新派側の犬を見ると、歯をむき出し生死をかけて戦う始末だった [チュット 2014:13]。

ゴイも繰り返し忠告しているように、このような状況は仏教の教えそのものにも反し、仏教徒同士が分裂することは人々の苦しみを増やすことになった。しかし、その後も続くことになる両派の争いは、社会基盤として存在してきた仏教がカンボジアの近代化に適応し、社会との新たな関係を築こうとする時代の象徴的出来事であったともいえる。

2. 農民詩人として

クロム・ゴイはカンボジアがフランスの保護国となった2年後の1865年、カンダール州プノンペン郡コンボール村に生まれた。本名はウク・ウーといい、クロムという名は後に村役場で働いた時の役職名で、ゴイという呼び名は通称である [ឃុំ 1966:13]。父はコンボール村長で、母は同じく近隣村長の娘であった。そのような家庭に生まれた彼は、経済的に不自由はなかった。学問好きであった彼は、一般的なカンボジアの男子がそうであったように、子供のころ同州のオンカ・バンチャック寺で出家して僧侶とな

った。ゴイは詩の中で、男子は親孝行するのが最大の徳であると詠っているように [၇၆ ၂၀၁၆:၄၃-၄၄]、出家経験をした後数年して還俗し、村長であった父の元で徴税役人の仕事に就いた。しかし、徴税の仕事は非情でなければ務まらない仕事であった¹⁷⁾。彼は 21 歳になると役人を辞め、再びオンカ・バンチャック寺に入りトゥト師について三蔵を学び直し比丘となった。比丘になるには適当な年齢ではあるが、誰もがなりたくてもなれない役人の職を捨てるということは、徴税という仕事に矛盾を感じ仏教によって人々に生きる希望を与える必要性を感じた末ではないだろうか。そのような彼の心は、仏教が己のみの解脱を目指す宗教ではなく、苦しむ人々に生きる智慧を与え、自立を促す教えであると説く詩の中に見出すことができる。ゴイは三蔵を学んだ後、更に多くのアチャー¹⁸⁾に師事して瞑想を学んだ。しかし、敢えて再入門した仏教の世界で、彼は僧の墮落やサンガの混乱を目にし、自分が思い描く理想の仏教と乖離していることに失望したのであろう。5 年後に還俗して再び父の元に戻り法務担当の役人として働いた。二度出家と還俗を繰り返したゴイであったが、そのころ発生した農民暴動を目の当たりにした彼は、役人の仕事に見切りをつけて一介の農民として生活する道を選んだ [၇၆ ၂၀၁၆:၅-၇]。還俗した彼は故郷で結婚して 6 人の子供に恵まれた。

ゴイが敢えて二度まで安定した職を投げ捨てて農民の生活に身を投じた真の理由は、先行研究でも明らかにされていない。しかし、農民の窮状から目を反らし、地位に甘んじてその役割を果たそうとしない僧や役人の中に身を置くことは自らを欺くことになる。そう考えた彼が農民を啓蒙し、サンガや社会の矛盾を正す必要性を感じたとしても不思議ではない。彼の詩の中には、農民の哀しみや苦しみに思いを寄せる反面、役人や仏教界など社会の矛盾を正そうとする彼の心が溢れている。

ゴイは農作業が終わる時期や祭りには村々の人々に招かれサーディアウに合わせた詩を披露し、生きていくうえで必要な考え方や仏教の教えに立った堅実で正しい生き方を説き聞かせた。彼は体つきが大きく、腹が出て、短髪をかき上げ鼻髭を蓄えた風貌であった¹⁹⁾。チョーン・クバン²⁰⁾とボタン付きの白い詰襟の上着を好んで着てサンダル履きで、組み立て式のサーディアウを携えてどこへでも気軽に出かけer 人気者であった [၇၆ ၂၀၁၆:၆]。彼は報酬を受け取らなかったが、農民は少しの米や果物をお礼として持ち寄って彼に寄付したという。人々は彼を愛称でピロム（心に美しく響く）・ゴイと呼び、彼自身もこの名前を好んで使った。彼の名は首都プノンペンにまで響き、時の大巨

ソン・ディエプは彼を王宮に呼んでシソワット国王の前で詩を披露させた。国王も彼の吟唱にいたく満足し、賞金とプレア・ピロム・ピアサー（美しい響きの詞）²¹⁾ という呼称を与えた上、王宮楽団の一員に加えた [ឃី 2016:៨]。

また、ゴイの名声は当時のフランス国立極東学院（在ハノイ）院長ジョルジュ・セデスに聞こえ、セデスは更に、ゴイを仏教研究所事務局長シュザンヌ・カルプレスに紹介した [Khing 2008:11]。彼女は王立図書館や仏教研究所の設立を提案し、それを実現させた気鋭のフランス人東洋学者である。自らも仏典を研究し、カンボジアの文化と仏教を保護するため精力的に仏典や民話などを集めて整理保存に努めていた [Edwards 2008:189]。彼女はゴイの詩の文化的価値を認め、仏教研究所の学者に書き取らせた上で4分冊の本に編集して同研究所から出版した。その際、彼女はゴイに敬意を表して1リエルの報酬を与えた²²⁾ [ឃី 2008:11]。ゴイの即興詩が文字として今日まで残されたのは、彼女のカンボジア文化に対する眼差しと学者としての強い責任感によるところが大きい。

後述するように教理にも通じる在家仏教徒であったゴイは、仏教変革派の僧とも深いつながりを持った。僧と対等に意見を交わす在家が珍しかった当時、彼の考えは変革派の僧に新たな気付きや刺激を与えたことであろう。仏教に帰依しカンボジアの人々を愛した彼は、人々に惜しまれながら1936年71歳で亡くなった。

III. 人と社会への眼差し

1. ピロム・ピアサーの韻律

ゴイは数多くの作品を生み出したとされるが、すべてが即興詩であるため記録として残されているものは少なく [ឃី 2016:៨]、現存する作品は8篇のみである。まず、下記の4篇が仏教研究所から作品集が発行されたことによって、ゴイの作品が文献として後世に残されることになった [ឃី 2008:11]。

- (1) 「新しい教訓」（チバップ・ルバウク・トマイ）1932年
- (2) 「新しい時代の遺訓」（チバップ・ケー・カール・トマイ）1932年
- (3) 「注意喚起」（セイクダイ・ロムルク・ダハ・トゥアン）1933年

(4)「男性・女性への教訓詩」(ピアク・カープ・プロダウ・チュオン・プロホ・スライ)

1933-1934 年

また、ポイ編集による『クロム・ゴイ』[[qiu 2016](#)] には上記 4 篇に加えて以下の 2 篇が加えられている。

(5)「クロム・ゴイの遺言」(ボンダム・クロム・ゴイ) 1935 年

(6)「サンガへの訓戒」(ルバック・チバップ・サン) 1935 年

(5)については出典不明であるが、(6)は王立図書館発行の雑誌『カンプチア・ソリヤ』1937 年第 9 年度第 7 号 pp.105-125. にクロム・ゴイの作詩として全篇を認めることができる。更に、これらの作品とは別に以下の作品が 1937 年の『カンプチア・ソリヤ』誌上に個別に掲載されている。

(7)「子供たちへの教訓」(チバップ・コーン・チャウ)『カンプチア・ソリヤ』1937 年第 9 年度第 5 号 pp.109-122。

(8)「男性・女性への教訓」(チバップ・プロダウ・チュオン・プロホ・スライ)『カンプチア・ソリヤ』1937 年第 9 年度第 8 号 pp.207-220。なお、この作品は(4)と類似した題がつけられているが、内容はまったく異なっている。

以上の作品は、4 音節単位の句を 7 句連ねて 1 節を構成するボト・カーカテ、5 音節と 6 音節句を 2 度繰り返して 1 節を構成するボト・プロムクット、7 音節単位の句を連ねるボト・ピアク・プラムピーの 3 種の技法が用いられ、すべてが長篇詩である。また、本来のカンボジア語の語彙は 1 音節や 2 音節語が多く、多音節の語彙は外来語に由来するものが多い。仏教用語は多音節語であるパーリ語由来であるため、彼の詩作においても仏教用語が使われる作品は 7 音節句で構成されるボト・ピアク・プラムピーの技法が取られている。作品を概観してみると次のような構成とテーマであることが分かる。

(1) 「新しい教訓」(チバップ・ルバック・トマイ)

カーカテ形式で詠われ 241 節で完結する。カンボジア農民の無知と怠惰に対する訓戒や啓蒙、仏教の大切さ、学問の勧め、結婚の心得、役人の悪事と搾取に対する怒り、天災の被害に対する嘆きの言葉などが溢れている。

(2) 「新しい時代の遺訓」(チバップ・ケー・カール・トマイ)

プロムクット形式で全篇 149 節から成る。両親を大切にすること、夫婦のあり方、考えながら働いて生活を守ることなどの人生訓が語られている。

(3) 「注意喚起」(セイクダイ・ロムルク・ダハ・トゥアン)

ピアク・プラムピー形式で詠われ、95 節の中に子供たちへの教え、カンボジア人の間違った土俗信仰や親不幸の戒め、仏教への帰依の勧め、サンガ分裂への批判などがテーマとして取り上げられる。

(4) 「男性・女性への教訓詩」(ピアクカーブ・プロダウ・チュオン・プロホ・スライ)

ピアク・プラムピー形式で作詩され、76 節の中に仏教の教え、ゴイ自身の仏教思想、特に男子は出家して仏教の教えを身に着けることの肝要さや僧の破戒への戒めが詠われている。

(5) 「クロム・ゴイの遺言」(ボンダム・クロム・ゴイ)

ピアク・プラムピー形式 91 節で構成される。中国人、ベトナム人の金儲けの巧さに対してカンボジア人の愚かさを戒め、読み書き、算盤を学ぶこと、経典を読み、仏教に帰依して堅実な生活を営むことなど基本的な生き方について諭す詩である。

(6) 「サンガへの訓戒」(ルバウク・チバップ・サン)

ピアク・プラムピー形式で詠われ、143 節で構成された作品である。僧の破戒の実態を痛切に批判し、サンガとしてのあるべき姿を訴える。なお、この作品の一部には(4)の一節と重複する内容が見られる。

(7) 「子供たちへの教訓」(チバップ・コーン・チャウ)

プロムクット形式 108 節の中に、完全な人間であることは難しいが心を美しくする努力をし、地道に働いて稼いだお金は徳を積むために使うこと、呪術などを信じることなく仏教の教えに従って知恵を持って生きることなどが説かれている。

(8) 「男性・女性への教訓」(チバップ・プロダウ・チュオン・プロホ・スライ)

ピアク・プラムピー形式 112 節の中に、怒りや争いの戒め、夫婦の仲睦まじい生き方、両親への報恩、仏教を中心とした生活を守る大切さなどの教えが込められている。

2. ゴイの視点

先行研究ではそれぞれゴイの詩を分析し、テーマの分類を試みている。リーは、ゴイの作品をカンボジア人一人ひとりが教訓として受け止めるようにと述べた上で、テーマを次のように分類し各篇から数節ずつを引用して内容を示している [Nguyễn 1966:29-65]。

①子供のしつけ

「新しい時代の遺訓」(チバップ・ケー・カール・トマイ)の中から 46 節引用

「新しい教訓」(チバップ・ルバウク・トマイ)の中から 22 節引用

②労働の精励

「新しい教訓」(チバップ・ルバウク・トマイ)の中から 27 節引用

「注意喚起」(セイクダイ・ロムルク・ダハ・トゥアン)から 11 節引用

③配偶者選び

「新しい教訓」(チバップ・ルバウク・トマイ)の中から 16 節引用

④崇敬する仏教への忠告

「注意喚起」(セイクダイ・ロムルク・ダハ・トゥアン)から 23 節引用

「男性・女性への教訓詩」(ピアク・カープ・プロダウ・チュオン・プロホ・スライ)
から 7 節引用

また、キン [ឃីង 2008:12-13] は、ゴイの詩はすべてカンボジア人への深い愛情に基づく戒めであるとの理解に立ってテーマを次のように分析している。

- ① 国家権力の搾取によるカンボジア人の貧困
- ② 中国人・ベトナム人の狡猾さ
- ③ 新・旧仏法派に分かれたカンボジア人同志の争い
- ④ カンボジア人に願う精励への思い

更に、特に下記の 5 項目については、具体的な詩の 1 節を引用してゴイの視点が抽出されている。

a. 崇敬する仏教の争い

「注意喚起」(セイクダイ・ロムルク・ダハ・トゥアン)より 1 節を引用

b. 精励への戒め

「新しい教訓」(チバップ・ルバウク・トマイ)より 1 節を引用

c. 配偶者選び

「新しい教訓」(チバップ・ルバウク・トマイ)より 1 節を引用

d. 親孝行

「新しい時代の遺訓」(チバップ・ケー・カール・トマイ)より 1 節を引用

e. 間違いを犯す

「新しい教訓」(チバップ・ルバウク・トマイ)より 1 節を引用

一方、ポイ編集の『クロム・ゴイ』[ឡ 2008] でゴイの経歴を記述したイーは、ゴイの作品の視点を以下の 8 項目に分類している [ឡ 2016: ៥-៦]。特に引用された詩文はなく 6 作品全篇が掲載されている。

- ①農作業による生活の確立
- ②配偶者選び
- ③国民の貧困とその理由
- ④カンボジア人の無知文盲
- ⑤農業に対する怠惰、不活動、無気力
- ⑥団結を乱す争い
- ⑦カンボジア人の独立心とアイデンティティの喪失
- ⑧クメール文化の衰微

上述のようにゴイの 8 篇の詩が文献として今日まで残されたことにより、カンボジア人によって語られた当時の社会状況をつぶさに知ることができる。同時に、先行研究によって提起されたゴイの視点を総合的に検討してみると、彼が社会の底辺で苦しむカンボジア人の無知文盲や怠惰を戒め、仏教徒同士の争いを諫め、僧は自らの目標を失わず、皆が一つの仏教を信奉して仕事と学問に励み堅実な生活を送るように望んでいたことが浮き彫りにされる。

IV. 人々への訓えと仏教への思い

ゴイの詩には、仏教の教えに従うことが現実社会の苦しみから自己を救済する道であることを人々に理解させようとする彼の思想が明確に打ち出されている。また、彼は自らが深く仏教に帰依していたことから、全作品を通して一貫して仏教の教えである「慈悲」²³⁾の心を感じ取ることができる。人々が仏教の教えに従って高い倫理性に支えられた知恵を得て、厳しい現実の中にあっても堅実な生活基盤を築くように訴えたのである。

先行研究において作品のテーマについての分類はなされているが、個々の詩の解釈は

なされていない。本章では、社会の底辺にいる人々の実態や彼らが置かれた状況、仏教界の実情に言及したゴイの詩の中から①訓戒と啓蒙②役人の悪事と天災被害③仏教帰依の訴え④破戒の糾弾⑤仏教界の分裂に対する警告、に言及した部分に注目し、人々に対する眼差しや彼の思想の根幹にある在家としての仏教への思いを明らかにしたい。

1. 訓戒と啓蒙

ゴイは人々の悪事、貧しさや愚かさの実態を指摘し、正しく、まじめに生きようと次のように訴える。

・・・・・・・・・・(略)

今どきの人々　間違いを正しいかのようにして　平気で
悪事に走る　うそをつき　他人をだまして
金銀におぼれる

悪知恵　傲慢　暴力
手でも足でも　殴る蹴る　刑務所で鎖につながれ
ついには絞首台

・・・・・・・・・・(略)

強盗や盗みはいけない　怠けてはいけない　騙してはいけない
金を騙し取れば　首に鎖　正しい行いをしよう
正しく生きよう

働こう　土をならし　田を耕して稲を刈ろう
他人ではなく　息子よ父に従おう　近くの道に明かりを掲げよう
荊をはびこらせないように

・・・・・・・・・・(略)

精を出して働こう　大地を耕そう　在家なのだから
嘘を信じて　借金して　首が回らず
田畑を失う

・・・・・・・・・・(略)

貧乏人は　もがき苦しむ　ひもじいばかり

人に恩を施そうにも 何もない 学びもしない

八つの道²⁴⁾を

まるで漁師だ せっせと 田を作ることはない

行いが業となる 季節が巡るたびに 自分は正しいかまちがいかと

努力しようかやめようかと迷う

・・・・・・・・・・(略)

アル中仲間 集まって酒盛り 若い衆に

なんくせをつけ 泥酔し 大口をたたく

貧乏になるのも知らず

人のいうことを無視し 金があれば酒を飲み 飲んでしまえば無一文

自分は文無し 中国人は帳簿付け ツケが溜まりすぎて

土地は質草

・・・・・・・・・・(略)

「新しい教訓」より

・・・・・・・・・・(略)

生まれて人間になるということは 遠くでも近くでも見通し

何事も着実にやりとげ しっかり考えるということ

愚かな人間はそれに気づかず まるで盲目のよう

姿はあっても頼りにならず 愚かになってゆくばかり

・・・・・・・・・・(略)

「クロム・ゴイの遺言」より

これらの詩から、農民が無知で、悪事に手を染め、酒を飲んでは借金し、貧乏の泥沼にはまっていく様子を読み取ることができる。また、貧乏なカンボジア人の対極にあった中国人²⁵⁾が他者的存在として描写されている。ゴイはどん底の人々に対して、怠けず、まじめに働き、仏教の教えに忠実に従い、正しい行いをして生きていくよう戒める。何よりも、考えを巡らせて良し悪しを判断し物事に臨むことの必要性を訴える。出家経験を持つ彼は、どんな人も上座仏教の聖典であるパーリ語三蔵を学び、正見（正しい見

解)、正思(正しい思念)、正語(正しい言語的行為)、正業(正しい身体的行為)、正命(正しい生活)、正精進(正しい努力)、正念(しっかりした憶念や意識)、正定(心を落ち着け精神を統一すること)という八正道を实践すれば正しく堅実に生きる方法を知ることができると考えていた。

2. 役人の悪事と天災被害

当時は「悪徳役人」もいた。人々は役人に苦しめられる上、天災にも見舞われて二重の苦しみに喘いでいたことが詠われている。

・・・・・・・・(略)

名誉があり 高い地位があるなら 役人がふさわしい

立派な官吏になり 印章をもつ大臣 王や知事

お役所で

フランスの法律に詳しくなっても 正直であれ 恩と寛大さ忘れるな

高慢になるな 親族を忘れるな 裁判は

公平であれ

・・・・・・・・(略)

盗人強盗 妻を娶り 遠く離れた土地に行き

金で村長職を買い 知事を買収 そしらぬ顔で

政府の金は使い放題

搾取し 陰でこっそり盗み取り 知恵を働かせて

指を見つめて 偽りの印を押し 神の目を欺く

土地を守る神の

もうひとつの悪は 悪事が善 それは役人にとっては善

責めて縛って捕まえて 慈悲なく呵責なく 役人の善

その善は悪事だ

これらの行い なすべからず 決してやってはいけない

ブッダの教えに従って 跪拝し生きていくなれば 身はいかに貧しくても

神のご加護がある

・・・・・・・・・・(略)

「新しい教訓」より

次のように水害による甚大な被害の実態も伝えている。そのような中でも過酷な生活を強いられた農民の姿を詠い憐れみの気持ちを表す。

・・・・・・・・・・(略)

辰年十干 6 年 大雨に被害 下弦が二度巡る
夜といわず昼といわず 空は暗く嵐が吹き 豪雨と洪水
大地は沈む
故郷の小川や谷の 木々は すべて倒れ
竹も 根こそぎ折れ 木の実は
実ったばかりなのに
戌年亥年子年 この間 続けて 3 年
病気が流行り 人は大勢死に 寅年卯年もこの恐怖
米の収穫は望めない
巳年も 雨は降り続け 昔の伝えにもある
陰暦 12 月 大地は見えず 全ての人は川の中
畑は全滅だ
道は断たれ 政府は お手上げ
未年も大災害 遺産はすべて質に行き 口に入れるもの皆無
餓死に至る

・・・・・・・・・・(略)

北から南まで 老いも若きも 見渡せど
人影なく 何も見えず まさに無の世界
どこに行ったのだろう
時は 陰暦 4 月 お坊さんはいない
郡長がいるだけ 適当に量って 1 ヘクタールの土地から
40 桶を集める

村長は 分け前を取って 10 桶がフランス
地方政府の 蔵に入る 家族はザル 2 杯の
税を払う
緩くも厳しくもないが 必死で働かねば カンボジア人なら
男の子は 父母の元にいよう 政府が厳しく
税を払えという
・・・・・・・・・・(略)

「新しい教訓」より

ここでは悪事によって金を稼いで買官を働く者もいたことが明らかにされている。役人の墮落を指弾し、如何に地位や財産があっても誠実に公平に役人としての務めを果たすように訴える。父親の元で役人を経験した彼だからこそ、その実態を知り敢えて恥部を暴露して歪んだ行いを戒めようとしたのである。また、甚大な水害の被害の後でも税金が過酷に取り立てられたことが明らかにされている。職位を利用して農民を苦しめ、税金の取り立てをする役人の立場に甘んじていることは彼の良心が許さなかったのであろう。そのため彼は安定した職を投げ打って農民として暮らす決心をしたのである。

3. 仏教帰依の訴え

僧として修行した彼は三蔵を学び、仏教の教理にも明るかった。彼は仏教の優れた教えを学び、帰依して人間としての務めを果たそうと訴える。

・・・・・・・・・・(略)
男として生まれたら 考えを巡らせよう あらゆることに
出家して学ぼう パーリ語仏典を この世を生きぬくことができる
隙間をつくるでない
国民ならば働こう 雌牛を飼い 一生懸命働こう
貧乏は怠けから がんばって 知恵をつけよう
考えに勝るものはない
幸せを 願うなら 考えて生み出すだけ

前世から 積み上げた徳が 考えを生み出し
幸せを作る

・・・・・・・(略)

世の若者よ 覚えておこう 経典は
規範 仏の言葉を聞こう 僧の説法をとおして
四つのことがら²⁶⁾

知恵の人に学ぼう 怒りそうになったら 心を静め
争いそうになったら 抑えよう 人はなのしつても
いつか怒るのをやめる

・・・・・・・(略)

供え、戒、布施 知らなければ学べ なければ求めよ
善きこと清らかであること 努力して求め 進んで学ぼう
身を守ることになる
これは教えだ 基本的な 習いとしての
男も女も 倦むことなく そのように
伝えておきたい

「新しい教訓」より

・・・・・・・(略)

素直な子は礼儀正しく 両親の名誉を重んじる
両親は卑しい身であっても 名誉を損なわせてはいけない
勉学に励んで身を立て 両親を助ける
愚か者は怠惰 仏典に興味をもたない
学べ子供たちよ 男の子も女の子も文字を学べ
ブッダのころは 比丘も比丘尼も
比丘も沙弥も みな経を唱えた
修行の足りない僧は あやふやだ
ブッダは定めた 今日伝わる戒律を
カンボジア人の伝統は まじめに耕作し米を作ること

正しい教えを 知恵で照らされた道として守る

・・・・・・・・・・(略)

「クロム・ゴイの遺言」より

ゴイは無知、無力、無精なカンボジア人に自覚を促し、いかに苦しくとも正しく堅実に生きれば必ず道は開けることを伝えようとした。そして、その術を認識するには仏教の教えを理解し、実践することが肝要であると説いた。ブッダの基本的な教えとして四諦八正道がある。彼は四つのこと（四諦または四聖諦）を理解しようと人々に呼びかける。四諦とは四つの真理、すなわち、苦しみの存在を指摘する苦諦、苦しみの生起の原因を示す集諦、苦しみの止滅の原理を示す滅諦、苦しみの止滅に至る道を説く道諦をいう〔石井 1993:301-302〕。苦しみの止滅に至る道は八正道として説かれ、僧の修行にとって最も基本的な教えである。しかし、在家は出家者である僧とは異なり、膨大なパーリ語三蔵の教理を理解し、厳しい戒律を守って涅槃を目指すことは不可能である。彼らは日ごろの営みの中で、平安な暮らしと生きる希望を手にすることができればよかった。

水野〔2009:5〕は、本来の仏教は社会・人生の平和と幸福を願い、それに到達するためのもっとも合理的な手段方法を説くものであるとする。八正道のような教えを俗世間の人々が文字通りに受け止めるとき、自らの生活の中での実践倫理として生かすことができる。ゴイは人々がそのような基本的な教えに親しみ、積極的な生き方に対する知恵を獲得するように願った。仏教を学ぼうという呼びかけや仏教の教えは、彼の他の詩の随所に現れる。ゴイは仏教の合理的な教えが人々の自立した精神の涵養を助けると信じていたのである。

4. 破戒の糾弾

上座仏教僧は厳しく戒律を守って修行しなければならない。しかし、当時戒律を破る僧が少なくなかったことがこの詩によって明らかにされている。

・・・・・・・・・・(略)

戒律から離れ 227 の戒²⁷⁾ を破る

省みることなし 出家者ならば怠らず守るべし

不殺生不偷盜は戒の第 1 不蓄金銀宝は第 10 戒

僧の破戒 慨嘆に耐えず

金を掠め 破戒を隠す

在家の布施を 邪にも貯め込む

・・・・・・・・(略)

パーティモッカ 227 学処²⁸⁾ 僧は怠けて修行せず

破戒の数々 気にもせず

パーチッティヤ 92 学処²⁹⁾ ニッサッギヤ 30 学処³⁰⁾ パーラージカ 4 学処³¹⁾

知っていれば修行して 正しくあれば堅守する

真剣に学ばないゆえに あらゆることはうろ覚え

己が間違いだと知っていても 相手が無知だといって喧嘩をする

サンガーディセーサ³²⁾ の怠り 13 学処を心に留めて

自制したことがあれば 騒がず怒らず間違わず

六根³³⁾ に任せて パーチッティヤの罪の数々

目鼻耳舌 目はあちらを見

舌ではあれこれ味わい 冗談をいってからかう

・・・・・・・・(略)・

食べ物にありつこうと徘徊し 好きな時に食べ

セーキヤ³⁴⁾ 75 学処 破戒の罪なり

僧は軽く見ている パーティデーサニーヤ 4 学処³⁵⁾

・・・・・・・・(略)

心を保ち己に厳しく 敢えて破戒することなし

僧に三つの姿あり 一、真に涅槃を目指す者

二、己の考えを 現世で高めるべく努める者

三、大志をもたず パーリ語呪文に走る者

医者としての名を高め 呪文を唱えて病人に当たる

娘、寡に呪文をかけて 遠くに座ることはなく

呪文で虜にしてしまい 僧と在家の一線なし

・・・・・・・・・・(略)

私は恐れる　　サンガを救う仏教が傷つくことを
いかに批判してもしきれない　　僧が戒律を破ること

・・・・・・・・・・(略)

「サンガへの訓戒」より

彼は出家経験と還俗を二度繰り返した。仏教の深い知識を持つゴイは、仏教の合理的な教えは人間の生き方に指針を与え、自立へと導くものであると確信し、人々が仏教の教えを学んで自らの人生を確立するように説こうとした。その道を示すべきサンガは律蔵で定められた 227 戒を守って厳しい修行を積む僧の集団であるべきである。僧が守るべき戒は、パーラージカ、サンガーディセーサ、アニヤタ、ニッサッギヤ・パーチッティヤ、パーチッティヤ、パーティデーサニーヤ、セーキヤ、アディカラナサマタの 8 群に分けて細かく規定されている [石井 1993:307-308]。しかし、彼が見たものは、これらの戒律を破り学問を疎かにする僧の姿であった。ゴイは人々とは隔絶した世界にあって尊敬を集めるべき立場にある者の墮落を糾弾し、僧は阿羅漢を目指し、涅槃に入るために仏典と向き合って真剣に修行に励めと痛切に訴えたのである。

5. 仏教徒の分裂に対する警告

カンボジア仏教主流派であるモハーニカーイ派内部の激しい対立は在家仏教徒であるゴイを苦しめた。彼はこの状況を嘆き批判して次のように詠った。

・・・・・・・・・・(略)

旧仏法派は新仏法派を批判する　　パーリ語仏典は節度というものを説く
お互い批判をやめよう　　口を慎もう
仏法は一つでありブッダは一人　　僧は寺院に拠って学ぶもの
ある僧は仏典を覚えず　　そこから外れて真のあり方を知らない

・・・・・・・・・・(略)

仏典とブッダは　　お互いに争えとは教えていない
各寺の僧は三蔵を守り　　一致団結せよと説く

各寺の仏像を 昼夜崇めよと教える
努めて三蔵を 唱えよう
意味がわからなければ 聞けばよい
パーリ語を理解する僧が 翻訳してくれた
愚かな者はブッダの言葉を聴かない まちがいといわれて怒る
百千にのぼる三蔵は 数えきれない
すべてわかったつもりで 翻訳ものを学ぼうとしない
自分はまちがっていることを知らず 聖人のいうことを認めない
パーリ語をまちがって理解し 古いやりかたにこだわり改めない
仏典は翻訳などできない 祭事に役立たないという
翻訳すれば人の役に立つのに 自分は古いやり方で読む
・・・・・・・・・・(略)
ブッダが説教し識者が口述し 律蔵として残した
この多くの経典を 翻訳した
パーリ語の真のことばは 詳しく翻訳された
聞いて明確に理解できるといってはいけない 古い偽経にたよってはならない
昔の仏典は どこかにいってしまい散逸していた
僧たちは正しいこととまちがったことを見分けて あるものを捨て
あるものを残し 整理しなおした
昔からの仏法の教えは 誰のものかわからない
混乱した経典は文字がまちがって 何の役にもたたない
僧はそのまちがいを見つけ パーリ語を検討して整理した
愚か者は仏法が 新しくなったと批難する
・・・・・・・・・・(略)
ブッダの言葉をおろそかにせず 正しく理解しよう
印刷されて 本になったのだ
これで経典がたくさん学べる 末永く大切にしよう
近頃愚かな人は僧に対して とやかく言う
紙に印刷した仏典は偽経 とつぶやく

これからはそのようなことを言うでない 印刷された仏典は地上に広まる

・・・・・・・・・・(略)

「注意喚起」より

僧の持戒の乱れに加えて、カンボジアの仏教徒は先に述べたようにモハーニカーイ派旧仏法派と新仏法派に分裂し激しく争っていた。新仏法派は仏典を中心に据え、そこで説かれていない教えや実践はすべて排除するという厳しい姿勢をとった。またパーリ語仏典をカンボジア語に翻訳し、仏教の教えを母語によって理解し、実践しようとしていた。一方で、旧仏法派は暗記したパーリ語の経文のみを唱え、三蔵の教えに直接由来しない実践を取り入れるなど、仏典に対する理解は緩やかであった〔小林 2011:284〕。王国政府も手を焼き、両派の争いを仲裁するために王令も公布されたが〔**ហ្លួត** 1993:20〕、効果はなく両派の溝は深まる一方であった。彼の詩の中で仏典がカンボジア語に翻訳されたことを評価し、旧来の仏教実践を批難していることから、ゴイ自身は新仏法派の支持者であったことは明らかである。しかし、彼は旧仏法の長所も認めた上で〔**ព្រឹត្តិ** 2016:64〕、サンガと仏教徒に対し旧仏法派と新仏法派の対立をやめて、両派がお互いに理解し合い一致団結すべきであると主張している。サンガ内部の対立によって国民が分断されることの愚を厳しく批判したものである。

他方、旧仏法派の頑なな考え方や仏典を理解せず、神を崇め呪文を唱える僧を批判し、僧として仏典の正しい理解が必要であることを力説した〔**ព្រឹត្តិ** 2016:65〕。また、仏典がカンボジア語に翻訳されたことを評価し、これによって経典に書かれている教えが、僧をはじめ在家にとっても容易に理解できるようになったことを僥倖としている。これらのことから、当時の僧や信者には土俗宗教に傾倒した者がいた実態や、仏典中心主義の新しい仏教が社会に浸透していく様子を見て取ることができる。人々が仏教を正しく理解し実践するために、三蔵経典の正しいカンボジア語での翻訳は、当時のサンガが衆生の仏教理解を深めるためになさねばならない優先課題であった。仏教変革派僧が仏典翻訳を積極的に進めた根拠はこの点にあるとしてもよい。

おわりに

クロム・ゴイが還俗し、田舎で農業を営む傍らサーディアウを小脇に村人たちに詩を詠って聞かせていたころ、カンボジア・サンガではチュオン・ナートなど若い僧たちによる仏教変革運動が展開されていた。ゴイは僧侶としての経験があったため、サンガに対しても齒に衣を着せず大胆に意見したことは詩の内容を見ても明らかである。また1929年、三蔵全巻のカンボジア語への翻訳を実現するために国王布告によって三蔵委員会が設置された³⁶⁾。これによって僧たちの自主的活動であった仏典整備は国家的プロジェクトに格上げされ、仏教変革運動が大きな転換期を迎えた時期でもあった。カンボジア語訳律蔵第一巻も刊行され³⁷⁾、変革派の青年僧たちは意気軒昂として活動していたにちがいない。

僧侶としての経験があるゴイは、在家の立場に立ってチュオン・ナートやフオト・タートをはじめ仏教変革派の僧たちに対し、仏教教理はサンガの独占物ではなく、ブッダの崇高な教えとしてすべての衆生が理解できるようにして広めるべきであると説き、仏教と僧が社会において果たすべき役割や仏教徒の分裂の愚について意見したことは十分考えられる。変革派僧たちも己だけが阿羅漢を目指すのではなく、衆生に気付きを与え自立に導くなど、近代化する社会に積極的に関わる仏教の必要性を認識しはじめていた。そのために、変革派僧は伝統派の抵抗にも関わらず仏典のカンボジア語訳に傾注し、そこで説かれている仏教の教えを衆生に広めることに情熱を燃やしたのである。カンボジア語に翻訳された仏教書は、高等パーリ語学校や王立図書館、仏教研究所によって印刷され、在家の人々でもそれを入手して母語で読めるようになった。ゴイの詩集をカルプレスが仏教研究所から出版したことも、詩の文化的価値を彼女が認めたことに加え、仏教の大切さを説く彼の思想が人々の啓蒙に役立つと考えたからでもあろう³⁸⁾。

一方で、ゴイの仏教に対する考えは「深い苦悩、自己批判、艱難辛苦への対処、自己および他人への精神的進歩」をもたらす仏教を求めた在家のシンハラ仏教徒ダルマパーラの思想〔ゴンブリッチ 2002:324〕に通じるものがある。そこには病気の治癒をし、金儲けをしてこの世で恵まれた生活を送ることを実現し、来世でよりよい人生に生まれ変わるために布施をして徳を積むという一般的な在家仏教徒の姿勢はない。ゴイは仏教が人々の精神的な支えとなって、苦しみの中でも強い倫理観を備え、堅実で自立した人生に導く合理的な宗教として機能することを期待した。

この思想はチュオン・ナートたち変革派僧に、社会における仏教と僧の役割を明確に

示し、新しい時代における仏教のあり方を示唆するものであった。彼ら仏教変革派僧たちはゴイのこうした考えに耳を傾け、社会における自分たちの役割を果たすために在家に視点を置いた仏教への転換の必要性を強く認識したことであろう。彼らは既に「在家戒律概説」[ឡ 1996] や初期『カンプチア・ソリヤ』誌上でのパーリ語仏典教説に関するカンボジア語による解説³⁹⁾などによって在家に向けた教理の布教活動を強化しつつあった。仏教変革派の中心人物チュオン・ナートの思想と活動については別途論じる予定であるが、精神性を高めることにおいて出家と在家が価値を共有する仏教を追求した彼の思想の背景には、人々の自立に資する仏教を期待したゴイのような在家信徒の考えとの共鳴があったと考えることができる。

1860 年、フランス人学者アンリ・ムオによってアンコール・ワットの存在が世界に知らされたことにより、カンボジア人は先祖の偉大さに気付いた⁴⁰⁾。しかし、フランス保護国時代のカンボジアは小国となり、人々は自らの向上心や国を思う気持ちなどを失っていた⁴¹⁾。ゴイが生きた 19 世紀末から 20 世紀初めは国家としての近代化が進む一方で、中国人やベトナム人などの他者が上部構造を占める社会の矛盾はカンボジア人に自らのアイデンティティを目覚めさせた [笹川 2006:194-195]。また、前述したように、新しい価値を内包するカンボジア仏教を確立しようとする仏教変革思想は、民族アイデンティティの認識を促す上でも貢献することとなった [Edwards 2008:15;24]。

1936 年、奇しくもゴイが没した同じ年に週刊新聞『ナガラワッタ』の刊行が始まった [坂本・岡田 2019:11]。この新聞はパイ・チューンやソン・ゴクタンなどカンボジアの初期ナショナリストを中心として編集された [Chheat et al. 2005:32]。同紙第 1 年 8 号 (1937 年 2 月 6 日) では「他の民族が我が民族を見下すのは、我が民族の発展がとても少なく彼らに遅れ、更に、国内の団結もなく、自分自身の民族を愛する気持ちがない」からだとかンボジア人を叱咤し [坂本・岡田 2019:15]、第 2 年 95 号 (1938 年 11 月 19 日) の記事では「旗 (民族のための)、宗教、言語を強固に守らなければならない」と唱えて民族アイデンティティ確立の必要性を煽った [坂本・岡田 2019:552]。しかし、これらはいずれも都市部の知識人読者層を対象とした訴えであり、農民をはじめ社会の底辺にいる多くの人々を啓蒙するには至らなかった。

一方で、クロム・ゴイの詩には天下国家を論じ、社会に思想的な影響を及ぼそうとする形跡は見あたらない。むしろ、彼は安定した役人の職を捨て、一介の農民として人々

に寄り添い、詩をとおして彼らに地についた生き方を示そうとした。矛盾に満ちた社会の底辺で生きる人々に対しては、仏教に帰依して現世を堅実に生き抜くことを訴えると同時に、社会の中心にあって人々に道を示すべきサンガに対しては一在家信徒の立場で仏教のあるべき姿を示し、その歪んだ状況を痛烈に批判した。カンボジアの人々と社会に警鐘を鳴らし続けたクロム・ゴイの思想の根底には、合理的な教えを説く仏教こそがカンボジア人の心の支えであるべきであり、その教えを忠実に守り、自立した人々こそが社会の礎でなければならない、という強い信念が潜んでいたと考えることができる。

注

- ¹⁾ 1930 年三蔵研究の目的で設立され、フランス人東洋学者シュザンヌ・カルプレスを事務局長としてカンボジア仏教の発展に寄与した。
- ²⁾ チュオン・ナート編纂によるカンボジア語国語辞典。一般的に正書法の基準とされる。
- ³⁾ 1914 年ごろチュオン・ナート、フオト・タートなど若手僧が中心となって律蔵に忠実な戒律の実践を唱道し、パーリ語三蔵のカンボジア語への翻訳に注力しはじめた [ហ្មុត 1993:7-36]。この運動は伝統派との激しい対立を引き起こした。
- ⁴⁾ 『ソパート』(ルム・クン作 1938 年) [岡田 2014]。
- ⁵⁾ 徴用税、畑税、高地畑税、コショウ税、粃税、舟税 [シルベストル 2019:177]。
- ⁶⁾ 関税、酒税、マッチ税、登記料税 [ibid.]。
- ⁷⁾ 徴用日数 10 日が課されたが、税金に代えることもできた [ibid.:184]。
- ⁸⁾ 19 世紀後半のスヴァの乱、ポ・カンボの乱、シヴオタの乱など [Hansen 2007:58-62]。
- ⁹⁾ バルデス事件。1925 年 4 月 18 日、コンポンチナン州クランリアウ村で、フランス人コンポンチナン州弁務官バルデスとカンボジア人通訳、護衛官の 3 人が過酷な税の取り立てに怒った住民によって惨殺された。
- ¹⁰⁾ 1926 年、ベトナム南部で創始された。至上神カオダイ(高台)を戴き、「天眼」を象徴とする。仏教、キリスト教、イスラム教、道教は同じ倫理を起源とし、人類と神はひとつであると説く [萩原 2012:572-573]。
- ¹¹⁾ 『ナガラワッタ』第 1 年 22 号(1937 年 5 月 29 日) [坂本・岡田 2019:116-117]、同 159 号(同年 7 月 10 日) [ibid.:159-160]、第 2 年 72 号(1938 年 6 月 4 日) [ibid.:394-396] の記事は、カオダイ教がカンボジアで広がることへの危機感を露わにしている。
- ¹²⁾ 1832 年、タイとベトナムがカンボジアの領有をめぐる衝突し、その後も両国の戦争が繰り返された。
- ¹³⁾ 後のラーマ IV 世(在位 1851~1868) モンクットは、西洋列強の圧力とキリスト教に對抗するため厳しく戒律を守るタマユット派を興した [石井 1969:184]。
- ¹⁴⁾ タマユットのカンボジア語発音。
- ¹⁵⁾ 参考：教派別内訳(2009 年)：モハーニカーイ派 4,231 寺、僧侶数 53,430 人、トアンマユット派 151 寺、僧侶数 1,308 人 [高田 2014:83]
- ¹⁶⁾ 1914 年、三蔵研究のためパーリ語学校として設立され、1922 年に高等パーリ語学校に改編された [Hansen 2007:131-137]。

- 17) ゴイの長男によれば、徴税人のゴイは農民から税金を取ることができず、管轄の弁務官に叱責され殴られたという [ស្តី 1966:23]。
- 18) 通常は経文と儀式を熟知する俗人の祭司を意味する [高田 2014:84]。瞑想の師はアチャー・カマッターンと称される [坂本 2001:987]。
- 19) プノンペン市内の彼の銅像は、厳格な顔つきとスリムな体形で表現されている。
- 20) 腰巻風のカンボジア式ズボン。
- 21) 訳語は岡田 [2014:59] に倣った。
- 22) 「1 リエルという金額は多額ではないが、この事実はフランス人すべてがカンボジア人を虐げる植民地主義者ではないことを示している。」 [ស្តី 2008:11]
- 23) 慈とは同胞に利益と安楽をもたらそうと望むこと、悲とは同胞から不利益と苦とを除去しようと欲すること [中村 2018:33]。
- 24) 八正道は、出家だけではなく在家の日常生活でも目的達成のため、きわめて有益かつ必要なものである [水野 2018:195-197]。
- 25) 『ナガラワッタ』第1年15号(1937年4月3日) [坂本・岡田 2019:70]、同17号(同年4月24日) [ibid.:86]、同44号(同年11月6日) [ibid.:235] で貧乏なカンボジア人に対し、中国人は勤勉で金持ちであると伝えている。
- 26) 四諦すなわち苦諦・集諦・滅諦・道諦をいう。
くたい じったい めったい どうたい
- 27) 律蔵 (Vinaya-piṭaka) に規定された比丘が守るべき戒律 [武田 2016:24]。
- 28) pāṭimokkha: 律蔵の中から戒227条(学処)のみを抽出した戒本集。[ibid.]。
- 29) pācittiya: 飲酒、殺生などの行為を禁じた戒92条 [石井 1969:80-93,1993:308]。
- 30) nissaggiya-pācittiya: 所有禁止の品物に関する戒30条 [ibid.]。
- 31) pārājika: 不殺生、不偷盗、不淫、不妄語の4条 [ibid.]。
- 32) saṅghādisesa: 女性の体に触れたり、サンガの分裂を招く行動など13条 [ibid.]。
- 33) 眼耳鼻舌身意の6感覚器官
- 34) sekhiya: 着衣、食事、用便の礼儀作法など75条 [石井 1969:80-93,1993:308]。
- 35) pāṭidesanīya: 食事に関する微罪4条 [ibid.]。
- 36) 1968年律蔵・経蔵・論蔵全110巻が完成した [ស្តី 1969:48]。
- 37) 1931年、国王出席のもと盛大な式典が催された [ibid.]。
- 38) カルプレスは「カンボジア仏教を単なる宗教としてではなく、社会を維持する強い精神的な力と考えるべきである」と記している [Goodman 2018:238]
- 39) 1926年から1927年にかけて『カンプチア・ソリヤ』誌上には仏教変革派による仏教教理に関する解説記事が毎号に見られる。
- 40) 『ナガラワッタ』第2年54号(1938年1月15日) [坂本・岡田 2019:302]、同62号(同年3月19日) [ibid.:356] でアンコール・ワットはカンボジア人の先祖による建築であることが強調されている。
- 41) 『ナガラワッタ』第1年15号(1937年4月3日) [坂本・岡田 2019:70]、同22号(同年5月29日) [ibid.:120]、同37号(同年9月18日) [ibid.:223] の記事ではカンボジア人が怠惰で、国のことを忘れ団結心をなくしていると嘆く。

参考文献

〈日本語文献〉

- 石井米雄. 1969. 『戒律の救い—小乗仏教』. 淡交社.
- . 1993. 「サンガと社会」 森 章司編『戒律の世界』. 溪水社.
- 上田広美. 2016. 「日々の想いをうたう」 東京外国語大学言語文化学部編『言葉から社会を考える』. 白水社.
- 大坪加奈子. 2016. 『社会の中でカンボジア仏教を生きる』. 風響社.
- 岡田知子. 2003. 「カンボジア文学史概説」. 2017年8月8日アクセス. <http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ase/cam/res/ot00.html>
- . 2014. 「天界の喜びから農民の苦しみまで」「小説の誕生と復興」 上田広美、岡田知子編『カンボジアを知るための62章（第2版）』. 明石書店.
- オズボーン、ミルトン（石澤良昭監訳・小倉貞夫訳）. 1996. 『シハヌーク：悲劇のカンボジア現代史』. 岩波書店
- ゴンブリッチ、リチャード、カナナート・オーバーサーカラ（島岩訳）. 2002. 『スリランカの仏教』. 法蔵館.
- 坂本恭章. 2001. 『カンボジア語辞典上・中・下』. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語研究所.
- 、岡田知子訳. 2019. 上田広美編『ナガラワッタ』. めこん.
- 笹川秀夫. 2006. 『アンコールの近代—植民地カンボジアにおける文化と政治』. 中央公論社.
- . 2009. 『植民地期のカンボジアにおける対仏教政策と仏教界の反応』 京都大学東南アジア研究所ワーキングペーパー85号. 京都大学東南アジア研究所.
- シルベストル・A.（坂本恭章訳）2019. 岡田知子、上田広美編『カンボジアの行政』. めこん.
- 高田美和. 2014. 「復活した信仰」 上田広美、岡田知子編『カンボジアを知るための62章（第2版）』. 明石書店.
- 武田 龍. 2016. 「律蔵」 パーリ学仏教文化学会上座仏教辞典編集委員会編『上座仏教辞典』. めこん.
- チュット・カイ（岡田知子訳）. 2014. 『追憶のカンボジア』. 東京外国語大学出版会.
- デルヴェール・J（石澤良昭監修・及川浩吉訳）. 2002. 『カンボジアの農民』. 風響社.
- 中村 元. 1973. 『原始仏教の生活倫理』. 春秋社.
- . 2018. 『慈悲』. 講談社.
- 浪花宣明. 1987. 『在家仏教の研究』. 法蔵館
- ニュオン・カン（上田広美訳）. 1999. 「カンボジア文学の諸相（前編・後編）」. 2017年8月8日アクセス. <http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ase/cam/nk13.html-15.html>.
- 萩原修子. 2012. 「カオダイ教」 世界宗教百科事典編集委員会編『世界宗教百科事典』.

丸善出版.

水野弘元. 2017. 『パーリ語辞典』. 春秋社.

———. 2018. 『仏教の基礎知識』. 春秋社

〈欧文文献〉

Chandler, David. 1996. *A History of Cambodia*. Colorado : Westview Press, Inc.

Chheat Sreang, Yin Sombo, Seng Hokmeng, Pong Pheakdeyboramy, Saom Sokreasey. 2005.

THE BUDDHIST INSTITUTE A Short History. Edited and translated by Penny Edwards.

Phnom Penh. Buddhist Institute.

Edwards, Penny. 2008. *Cambodge: The Cultivation of a Nation, 1860-1945*. Honolulu :

University of Hawaii Press.

Goodman, Joyce. 2018. Suzanne Karplès (1890-1969) thinking with the width and thickness of time. In *Bildungsgeschichte International Journal for the Historiography of Education* 2-2018. pp.231-244.

Hansen, Anne. 2011. *How to Behave*. Honolulu : University of Hawaii Press.

Khing Hoc Dy. 2006-2007. Suzanne Karplès and the Buddhist Institute. In *Sikṣācakr No.8-9*, Center for Khmer Studies: pp.55-59.

Osborne, Milton. 1978. Peasant Politics in Cambodia. In *Modern Asian Studies* : Cambridge University, pp.217-243.

〈カンボジア語文献〉

ក្រមង្គុយ. 1937a. ច្បាប់កូនចៅ. In *កម្ពុជសុរិយា* តំបន់ឆ្នាំទី៩ខ្សែ៨ឆ្នាំ១៩៣៧. ភ្នំពេញ. ព្រះរាជបណ្ណាល័យ.

pp.109-122. (クロム・ゴイ. 1937a. 「子供たちへの教訓」『カンプチア・ソリヤ』1937 年第 9 年第 5 号. プノンペン. 仏教研究所. pp.109-122.)

———. 1937b. ល្បើកច្បាប់. In *កម្ពុជសុរិយា* តំបន់ឆ្នាំទី៩ខ្សែ៧ឆ្នាំ១៩៣៧. ភ្នំពេញ. ព្រះរាជបណ្ណាល័យ.

pp.105-125. (———. 1937b. 「サンガへの教訓」『カンプチア・ソリヤ』1937 年第 9 年第 7 号. プノンペン. 仏教研究所. pp.105-125.)

———. 1937c. ច្បាប់ប្រដៅជនប្រុសស្រី. In *កម្ពុជសុរិយា* តំបន់ឆ្នាំទី៩ខ្សែ៨ឆ្នាំ១៩៣៧. ភ្នំពេញ. ព្រះរាជបណ្ណាល័យ.

pp.207-220. (———. 1937c. 「男性・女性への教訓」『カンプチア・ソリヤ』1937 年第 9 年第 8 号. プノンペン. 仏教研究所. pp.207-220)

យីង ហុក ឌី. 2008. *ក្រមង្គុយ និង ស្នាដៃ*. ភ្នំពេញ. បណ្ណាគារ អង្គរ. (キン・ホク・ディ. 2008.

『クロム・ゴイと作品』. プノンペン. アンコール書店)

ជួន ណាត. 1967. *វចនានុក្រមខ្មែរ* ភាគទី១ ភាគទី២. ភ្នំពេញ. ពុទ្ធសាសនបណ្ឌិត្យ. (チュオン・ナ

- ート. 1967. 『クメール語辞典上巻・下巻』. プノンペン. 仏教研究所.)
- . 1996. គិហិវិន័យសង្ខេប. អុំ ស៊ូរ និងជួន ណាត. *ក្របបណ្ណាមសង្ខេប និង គិហិវិន័យសង្ខេប*. ភ្នំពេញ. ពុទ្ធសាសនបណ្ឌិត្យ. (———. 1996. 「在家戒律概説」 ウム・スー、チュオン・ナート『三宝崇拝及び在家戒律概説』. プノンペン. 仏教研究所.)
- ពុយ តា. 2016. *ក្រមដ៏យ*. ភ្នំពេញ. ពន្លឺខ្មែរ. (ប៉ូយ・キア. 2016. 『クロム・ゴイ』. プノンペン. プオンルー・クマエ.)
- យី ធន់. 2016. ជីវប្រវត្តិអ្នកព្រះភិរម្យភាសា អ៊ូ ហៅ ដ៏យ. In *ក្រមដ៏យ* រៀបរៀងបោះពុម្ពឡើងដោយ ពុយ តា. ភ្នំពេញ. ពន្លឺខ្មែរ. (イー・トン. 2016. 「ピロム・ピアサー・ウー通称ゴイの経歴」 ポイ・キア編集発行『クロム・ゴイ』. プノンペン. プオンルー・クマエ.)
- លី ធាមតេង. 1960. *អ្នកនិពន្ធខ្មែរ ភិរម្យ ដ៏យ*. ភ្នំពេញ. បណ្ណាគារ សេង ងួន ហួត. (リー・ティアムテン. 1960. 『クメール人作家ピロム・ゴイ』. プノンペン. セーン・グオン・フオート書店.)
- ស៊ីង សុវណ្ណនី. 2012. *មហាបុរស ពុទ្ធសាសនានៅប្រទេសខ្មែរ*. ភ្នំពេញ. IDEA BOOK (シン・ソヴァンニ. 2012. 『カンボジアの仏教偉人』. プノンペン. IDEA BOOK.)
- ស៊ឹម រតនៈ. 2013. *សទ្ទានុក្រមព្រះពុទ្ធសាសនា*. ភ្នំពេញ. ពុទ្ធសាសនបណ្ឌិត្យ. (スム・ラタナ. 2013. 『仏教用語辞典』. プノンペン. 仏教研究所.)
- ហួត តាត. 1927. សេចក្តីថ្លែងគុណ ព្រះមហាវិមលធម្មនាម ថោង . In *កម្ពុជសុរិយា*. ឆ្នាំគម្រប់ពីរខ្សែ២. ភ្នំពេញ. ព្រះរាជបណ្ណាល័យ. pp.107-115. (フオート・タート. 1927. 「タオン師の恩」『カンプチア・ソリヤ』第2年度第2号. プノンペン. 王立図書館. pp.107-115.)
- . 1993. *កល្យាណមិត្ត របស់ ខ្ញុំ*. ភ្នំពេញ. ពុទ្ធសាសនបណ្ឌិត្យ. (フオート・タート. 1993. 『我が善友』. プノンペン. 仏教研究所)
- . 2006. ឧប្បត្តិហេតុ នៃ ព្រះត្រៃបិដកប្រែ. In *ជំនើរប្រវត្តិ ស្តីពី សាលាបាលីជាងខ្ពស់ ព្រះរាជបណ្ណាល័យ និង ក្រុមជំនុំ ៣*. លិសុរី. ភ្នំពេញ. រោងពុម្ពម៉េងហាវ. (フオート・タート. 2006. 「三蔵翻訳の出来事」リー・ソヴィ編『高等パーリ語学校、王立図書館及び三委員会に関する経緯』. プノンペン. メーン・ハーウ印刷所)
- អែម. 1927. អំពីអវិជ្ជានិងវិជ្ជា. In *កម្ពុជសុរិយា*. ឆ្នាំគម្រប់ពីរខ្សែ៣. ភ្នំពេញ. ព្រះរាជបណ្ណាល័យ. pp.247-251. (アエム. 1927. 「無明と知恵」『カンプチア・ソリヤ』第2年度第3号. プノンペン. 王立図書館. pp.247-251.)
- អុំ ស៊ូរ. 1927a. រតនត្រយបូជា. In *កម្ពុជសុរិយា*. ឆ្នាំគម្រប់ពីរខ្សែ១. ភ្នំពេញ. ព្រះរាជបណ្ណាល័យ. pp.39-56. (ウム・スー. 1927a. 「三宝に捧げる」『カンプチア・ソリヤ』第2年度第1号. プノンペン. 王立図書館. pp.39-56.)